

## 雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 6 7
ページ	1 0 2 - 1 0 5
発行年	1918-06-20
その他の言語のタイトル	雑報
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6844">http://hdl.handle.net/2298/6844</a>

術の研究家は海の理解者たらざるべからず。乞ふ、自然の嘆美家よ、海の熱愛者よ、來りて海の神秘を探り、自然の眞髓に觸れよ。寛林の晴嵐、鏡山の名月、以て卿等の詩囊を肥し、憧憬を滿して遺憾なからむ。朝、豪宕の波の曲、夜は殲麗の松の歌。晨、白金の霧に浸り、夕、黒潮の香に咽ぶ。誰か自然の恩寵の厚さに感じ、造化の慈愛の深さに泣かざらん名古屋城頭、豊公の遺圖と、領巾振山上、佐用姫の哀話とは更に多血多感なる卿等胸奥の琴線に共鳴を與へん。寮窓、鬱勃の思來りて松浦の青風に述べよ龍南、剛健の氣行きて玄海の紫濤に擲て。鞆々たる白波、奏する所の天韻は何？潜々たる碧水、傳ふる所の神話は何？

嗚呼合宿二旬の生活!!!惆悵たる千鳥の聲に眠り、流曉たる漁歌の節に醒む。嘴赤き海鳥の歌、夜半の枕を驚かせば、渚に薰る潮鳴の音、曉の夢を潤す。熱情の流露と、友愛の旋律と、發しては「武夫原頭」の高唱となり、「柏の旗」の愛誦となる。凝つては靄々の團欒となり、吞舟の快話となる。男性美の肉体を誇らんとする者、噫、誰かこの仙境の清遊を樂み、

この樂園の福音を享けざる。

合宿所、佐賀縣唐津町城内二の門、中村氏方（舊合宿所の近隣）

期日、七月十五日より八月四日まで、但し何日たりとも隨意入會又は脱會するを得。

合宿費、一日四十五錢乃至五十錢。

毛布持參する方都合好し。水泳術は小堀流により、初歩より始め、開期中三哩、五哩並に八月四日に十哩遠泳を行ひ、五哩、十哩の成功者には各メダルを呈す。

## 編輯後に

△原稿を集めて一再校を終るまで、人に知られぬ苦勞と心配がつきまどわつた。まだ物なれない私等には雑誌を作ると云ふことが愉快であると同時に自分の力の足りないことがしみ／＼悲しくなつたことも幾度かあつた、それに三年の諸君の卒業前までに、兎に角作り上げねばならないし、又諸君の期待に叛いては猶更すまないと、我等も精一杯

の努力はした積りですから倦き足りない所があつても、皆不慣のしたことゝ許して戴きたい。

△而し兎に角出来たのだ、責任を盡したのだと云ふ快よい氣持に、痛くなつた目を、こすりながら部屋を出て見ると雨だ！五月雨だ！而し私にはこの鬱しい雨も、感じのいゝ春雨と思ふことの出来る位、清々しい氣持になることが出来た、そして煙草に火を點けて今までのことや、先々のことを、彼から此へと考へて見た、

△論説も、短歌も、小説も、原稿は可なり集まつたものゝ、止むを得ない事情のために、立派な作品でありながら没書にせねばならなかつたのは遺憾であつたが私等の苦しい立場を察して、諒して下さつたら幸甚です。殊に演説部報に「國際關係を論ず」を掲載する様に書いて置きましたがあれを取消さねばならない様になつたことは残念です。△今度の號に委員が揃つて作品を出さうかとも思つたのですが、思の外原稿が集りさうだつたので、差し控へたのでしたが、没書になつた作の多かつたことを思へば、つまらないながら出せばよかつ

たと今更思つて居ます。

△今年も相變らず懸賞文を募集することにしました先任の方々も原稿が豫期した程集まらないので困つて居られた様でした。今度は皆遠慮なく筆を採つて下さい。兎に角二月に餘る休暇なんですから其の間には論文も、小説も、紀行文も、戯曲も出来るでせう、そして其の作品を健かな身体と一所にこの龍南まで運んで來て下さい。實際私等は隠れた作家を知りたいんです、一人でも自己を發表する勇氣のある人々を得たいのです。この龍南に定つた數人の作家ほか、私等が知らないと思へるのが苦しいのです。

賞其者は、それは諸君の勞に酬ゆるに充分ではありますまい、而し無理からレベルを一段下げて私等を失望させないで下さい。まだ確に定まりませんが多分一等拾圓、三等三圓位の圖書券だらうと思ひます、一寸附記して置きますが、五富の雜誌に乗せるんだと云ふことゝ翻譯物は賞に入らないことをお含みおき下さい。

△例によつて新委員の姓名を次に列舉して之の惡

いこのペンを投じます(夜見鳥)

赤木貞一 南 清之助

德永新太郎 石橋信夫

工藤好美

### 寄贈雜誌

帝國文學 三、四、五月號 本郷彌生町帝國文學會

學友會誌 二一號 京都帝國大學

校友會雜誌 二七〇、二七一號 第一高等學校々友會

嶽水會雜誌 六八號 第三高等學校嶽水會

校友會雜誌 二五號 熊本醫學專門學校

千葉醫學專門學校雜誌二〇一、二〇二號 千葉醫學專門學校友會

誠之會誌 二三號 福山中學誠之會

麗正會雜誌 二六號 臺灣總督府臺北中學校

多士 二四號 熊本濟々靈獎學會

研瑤會雜誌 一三八號 長崎醫學專門學校

學友會報 五月號 神戸高等商業學校

無盡燈 二三卷五號 眞宗大谷大學無盡燈社



## 再校の後に

夜見鳥生記

何時でも又何處にも、私等若い者の心には、はち切れさうな愛を、特別その對象を意識しないで感じるこそが出来る。よし其が人類に對してであらうが、自然に對してだらうが、又自分に對してであつても、その愛がこつちの心から出るのか、向ふのを受け入れるのか、兎に角愛を感じる。そして私等は何時までその愛を逃がさないで居りたい、確り抱いて居たい。其の間私等は愉快で、希望に燃れて、そして強いんだから。さうして其の間私等は藝術のための藝術品のことを毛程も思ふさしないんだから。そして其の間は私等の生命の愈久を信ずること出来るんだから………

眞實私等は若いんだ。愛も抱いてるんだ。

ほんさうに生きやうとするために、私等は生命の糧を得なくてはならない。肉体から放れても存し得る生命の糧を得ることは、それは容易ではなからう、而し私等は何も努力なくして其を擲もうと云ふんではない。如何なに壓迫されやうとも、如何なに苦しからうとも、私等は其を捉へて見せる。

之で私等の行く道も、目的も定つたんだ。